様式④

教員活動状況報告書

提出日：令和　6　年　2　月　29　日
所　属：　獣医　学部　獣医　学科
氏　名：　藤田　幸弘　職位：　教授
役　職：　臨床獣医学系　系主任

Ⅰ　ティーチング・ポートフォリオ

１．教育の責任（教育活動の範囲）

学部ならびに大学院教育を担当しており、主に小動物臨床外科および手術に関する実習、および本学附属動物病院に来院した症例を使用した実習では、整形外科を担当している。整形外科疾患に対する系統立てたアプローチの重要性を理解することを目的としている。

	学科・専攻	必，選，自	配当年次	受講者数
獣医外科学	獣医学科	必	4	140
小動物獣医総合臨床Ⅰ	獣医学科	必	5	140
総合獣医学	獣医学科	必	6	140
小動物病院実習	獣医学科	選	6	のべ 3
先端獣医療	獣医学科	選	6	40
獣医総合臨床実習	獣医学科	必	5	140
卒業論文	獣医学科	必	6	4
小動物臨床実習	獣医学科	必	5	140
獣医学概論	獣医学科	必	1	140
基礎・小動物獣医総合臨床Ⅱ	獣医学科	必	4	140
獣医外科学特論	研究科獣医学専攻	必	1	3
動物人間共生論	動物応用科学科	必	1	120
獣医学特論Ⅰ	獣医学科	必	5	4
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必	6	6

２．教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

講義科目では、教員からの一方的な講義を学生に聴講させるだけではなく、学生自身が考え、理解することを目指している。そのための工夫として、配付資料内に学生が記入できるような括弧を複数箇所設けており、自ら考え、実際に書くことで知識として定着するこ

とを期待している。実習科目では、実習の目的を理解した上で実習に臨むように指導し、理解度を確認するために、質問を募り、質問がない、という場合には教員から基本的な内容、よくある質問を中心に質問し、学生と教員でディスカッションを行うようにしている。臨床科目となるので、インプットするのみではなく、常にアウトプットする訓練を行うことを意識して、教育を行っている。

３．教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

アクティブラーニングについての取組

学生が自ら考えることを促すために、配付資料内に括弧埋めをさせるようにしている。教員から質問する内容は、基礎的な内容から始め、教員から早々に正答を明かさずに、学生自身の言葉で回答するように促している。おおよそ、学生からの回答が出そろった時点で、教員が正しいと考える答えを学生に伝える。学生がその答えに納得する場合もあるが、当然ながら、納得しない場合もある。納得しない場合は、なぜ納得にまでいたらないのか、その理由をさらに考えさせ、できるだけ学生自身で納得する状態に到達するようにサポートする。

ICT の教育への活用

実習科目においては、学生が行う実習内容の動画（デモンストレーションなど）を配信している。さらに、実習内で学生が行う症例発表および検討については、発表に使用するプレゼンテーションファイルを作成するための情報（静止画および動画ファイル）を提供し、学生自身がプレゼンテーションソフトによって作成する。そのファイルを使用して、受講学生および教員に対し症例発表を行った後、検討（ディスカッション）を全員で行っている。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）（A）

②学生の理解度の把握（A～C）（B）

③学生の自学自習を促すための工夫（A～C）（A）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）（A）

⑤双方向授業への工夫（A～C）（A）

※A（十分実施している）B（実施しているが十分でない）C（うまく取り組めていない）

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記載してください。）

入手可能な過去の国家試験問題を使用し、解答を導きつつ、関連する内容を詳細に解説した。国家試験を受験する年度の直前の年度の実際の試験問題について、詳細な解説などが

出回っていないことが推測されることから、“小動物の運動器疾患”に関連する問題を抽出し、正答を選択するための考え方、正答に早く到達する問題文の読み方・問題文および選択肢の解釈の仕方を中心に説明した。国家試験に頻出の疾患を中心に解説を行ったが、講義終了後に、学生各自が解いている過去の国家試験問題について、学生から多く質問を受けるようになったことから、国家試験の問題に対する考え方について理解が深まった、という印象である。

5.学生授業評価（分量の目安：４～7 行（160 字～280 字））
①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。
　具体的な要望があった場合には、次回の授業・実習に反映させるように努力した。

② ①の結果はどうでしたか。
　対応して以降、とくに追加の対応は必要なかった。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。
　次年度以降も、何か要望があれば、可能な限り早急に対応する。

6.学生の学修成果
①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

　インプットするだけではなく、インプットした情報・知識を自分の言葉でアウトプットできるように、学生には基礎的（簡単な）な質問から開始するようにしている。たとえ、質問に対する回答が明らかに間違っていたとしても、全てを否定することはせず、何かしらの理由をつけ、少しでも肯定するようにし、正答に近づくようにヒントを与えながら、学生の積極性を潰さない（消極的にならない）ように努めている。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価
　講義を聴講後、関連実習を行い、さらに実際の診療活動を見学した際に、点と点がつながって腑に落ちた、という感想を学生から得た。教員側から促さなくても、自ら質問するようになり、麻布大学の学生は質問ができて素晴らしい、学生の学ぶ姿勢を間近に見て獣医師として初心を思い出させてくれた、というコメントを外部の獣医師より頂いた。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

　大学教育に関わる FD については、可能な限り参加したつもりであり、今後についても、附属動物病院での診療業務などがない限り、参加する予定である。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

短期目標：質問を自ら考え、積極的に質問できる学生を増やすこと。投げかけられた質問に対して、自分の言葉で考え、回答できる学生を増やすこと。学生が疑問に思ったことを、そのまま放置せず、解決する努力をする考え方を定着させること。

長期目標：学生間、または学生と教員で濃密なディスカッションがスムーズに行えること。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ